



福岡観世会定期能

平成二十九年(第二回)

能 清 きよ

経 つね
替之型 多久島利之

狂言 文 ぶん

藏 ぞう
野村 万禄

能 船弁慶 ふなべんけい

前後之替 今村 一夫



とき 12月2日(土) 午後1時始
ところ 大濠公園能楽堂
入場券 自由席 7,000円
発売所 大濠公園能楽堂事務所
092-715-2155

清

久保誠一郎
 多久島利之
 江崎正左衛門
 白坂 信行
 飯田 清一
 相原 一彦
 絹キリ 多久島法子
 女アト 長宗 敦子
 輪 谷村 育子
 虫キリ 菊本 美貴
 班 三 菊本 澄代
 三 輪 今村 宮子
 松 虫 木月 晶子
 松田美栄子
 松本 登代
 今村 宮子
 木月 晶子

文

蔵

山口剛一郎
 大槻 文蔵
 井上裕之真
 井内 政徳
 今村嘉太郎
 武富 昭
 森本 哲郎
 大西 礼久
 山本 章弘
 鷹尾 維教
 吉住 講

△休憩十五分△
 仕 舞

船弁慶

今村 純
 今村 一夫
 松本 義昭
 江崎正左衛門
 是川 正彦
 野村 万禄

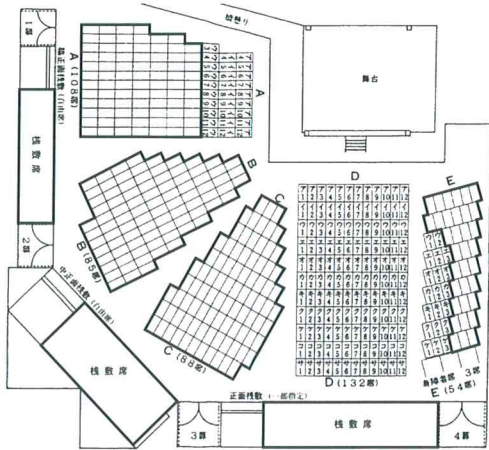
和布刈 今村嘉太郎
 玉鬘 坂口 貴信
 善界 山口剛一郎
 松風 大槻 文蔵
 笠之段 観世 清和
 鶴飼 鷹尾 維教
 井内 政徳
 今村 嘉伸
 坂口 信男
 久保誠一郎

能

白坂 保行
 飯富 章宏
 吉谷 潔
 森田 徳和

後見 森本 哲郎
 山本 章弘
 地謡 井内 政徳
 今村嘉太郎
 武富 昭
 山口剛一郎
 坂口 貴信
 坂口 信男
 今村 嘉伸
 大西 礼久

附祝言



※番号が書かれていない席は自由席です
 ※棧敷席は自由席です

平成三十年度予告

五月十九日(土)

十二月一日(土)

◆清経・替之型 (かえのかた)

平家の一門が西国へ都落ちした後、ひっそりと京に暮らす清経の妻のもとに、家臣の粟津三郎がやってきます。夫の自害を知らされ、その遺髪を前に、討死か病死ならばまだ諦めもつこうかと嘆き悲しみ、「見る度に心づくしの髪なれば髪にぞかえす元の社にと」と形見の髪を宇佐八幡に返して欲しいと、三郎につき返してしまいます。

泣き伏した妻の枕元に、清経の霊が現れます。

清経は、形見の髪を手離したことをなげり、入水に至った経緯を語り始めます。宇佐八幡から「世の中の愛さには神の無きものを何祈るらん心尽し」と不幸な神託をうけたこと、追われる者の焦燥と不安、繰り返す戦いの苦しみの中で、ついに死を決心して、愛用の笛を吹き、月を仰いで、念仏を唱え、柳が浦に身を投げたこと、修羅道に墮ちた苦患も念仏の功德により救われたと妻に訴える清経は、平家の公達の中でも殊に都会的で知的であり、その哀しみは現代に生きる私達にも迫り来ます。

◆文蔵

勝手に出かけた太郎冠者を、主人が叱りに行きます。都見物と聞いて許し、その委細を尋ねます。主人の伯父の元へ行き、珍しいものを御馳走になったものの、なんとという食べ物であったか忘れたと、太郎冠者は答えます。曲名になっている「文蔵」とは、さてなんでしょう。お楽しみに。

◆船弁慶・前後之替 (ぜんごのかえ)

源家の為に大きな功績をあげた義経でしたが、兄頼朝に疎まれ、忠義者の武蔵坊弁慶ら少人数と共に西国へ落ちていきます。あとを慕う静御前は、諭され、都に帰ることになり、大物浦にて、義経一行の幸を祈り、舞を舞うのでした。船出して程なく、にわかにも暴風が吹き荒れました。船頭の必死の努力もむなしく、船は波に揉まれ、その大波の向こうに、生ける時は勇猛で知られた平の武将知盛の怨霊が姿を現します。

義経はじめ郎党は必死に応じますが、これでは勝てぬと判じた弁慶が、義経と知盛の間に押し入り、五大力尊明王の呪文で戦います。

前シテは静御前後シテは平家の怨霊と、全く異なつた役柄です。作り物の舟だけで表現される大海原にての暴風の中で、劇的な場面も見所のひとつです。